

**2012 年度秋季 大阪大学 言語社会学会・言語文化学会 合同研究発表会
(大阪大学言語文化学会 第 42 回大会)**

発表要旨

第 1 室（旧棟 1 F 大会議室）

リーダビリティ指標の可能性と限界——日・米・英・韓・中の英字新聞の分析を通じて

藤原 郁郎（言語社会専攻博士後期課程）

最初にリーダビリティ指標の歴史的経緯について論考する。リーダビリティ指標がアメリカにおいて急速に発展をした理由は大きくは五つの要因がある。一つは 19 世紀後半の急速な工業化・都市化とともに児童・生徒への適切な読み物の客観的な選択の必要性が高まったこと。二つ目の理由は、工業化の進展とともに新たな移民が東・南ヨーロッパから流入し、その子弟の英語習得が教育の場に限られていたため、適正な英語のレベル分けの必要性が高まったこと。三つ目は、19 世紀末からのアメリカ行動主義心理学の発展とともに教育学の分野における計量分析が飛躍的に進歩したこと。四つ目は 1917 年のロシア革命以降、社会的コミュニケーションの必要性についての議論が高まり、第二次世界大戦以降、プレイン・イングリッシュ運動などの高揚とともに新聞などのマス・メディアにおけるリーダビリティへの自覚的な平準化の運動が高まったこと。そして五つ目の理由は、この平準化がメディアのみならず、高齢者の年金に関する公式文書、国防総省陸・海・空・海兵隊に入隊する高校を卒業した若い兵士に対しても理解可能な文書の作成など政府の各種文書における読みやすさが意識的に求められるようになったことが上げられる。

200 以上あるとされているリーダビリティ指標のなかから 3 つの主要な指標、GFI、FRE、FKGL、を取り上げ、指標化の構造における、「一文あたりの長さ」、「一単語あたりの長さ」、の重要性を指摘するとともに、新しい指標化の試みも紹介する。
最後に日本・アメリカ・イギリス・韓国・中国の英字新聞におけるリーダビリティ指標を比較することにより、日本の英字新聞がアメリカ・イギリスの新聞よりもリーダビリティ指標が高い傾向があり、読者にとって読みづらいことを指摘をする。

幼稚園における英語教育の導入状況——小学校英語の開始学年への示唆

佐藤 美紀（言語文化専攻博士後期課程）

本研究は幼稚園における英語教育の導入状況を調査し、幼稚園を取り巻く地域的・社会的背景を分析することで、幼稚園における英語教育の現状と将来を考察する。そのことにより、小学校における英語教育の導入開始学年について再考する必要性を提案する。予備調査として、高槻、茨木、摂津市における私立幼稚園で英語教育の導入実態を調べたところ

る 25 園の私立幼稚園の内 19 園が英語を導入しているという結果となり、導入割合が 76% という高い値であることが明らかになった。そこで、本研究では、さらに大阪府下全域における私立幼稚園での英語教育の導入状況の調査をした。平成 23 年度の文部科学省の学校基本調査によると、全国の幼稚園の 62% が私立であり、全国の園児の 82% が私立幼稚園に通うことが明らかにされている。その私立幼稚園の多くが英語を導入していることになると、相当数の子どもが英語学習を経験して小学校に入学してくることになる。大阪府の私立幼稚園連盟に加盟する 417 園の私立幼稚園における英語学習の導入について調査を実施した結果から、幼稚園の歴史、保育・教育理念や地域における現状を分析し、少子化による園児獲得競争の激化という状況が英語学習を導入する幼稚園を増加させている要因の 1 つであると考えた。

以上のような幼稚園英語の実態調査より、小学校英語における開始学年について再考する必要があるのではないかと考える。現行の小学校英語の必修学年は 5・6 年生であり、幼稚園で英語を学習してから 5 年生で英語授業を開始するまで間、4 年間のブランクが生じている。低学年からの導入が理想的である。少子化傾向が年々激化している日本の状況からは幼稚園における園児獲得競争のさらなる激化が予想され、英語の導入もさらに増加するであろう。小学校の英語教育の将来を考える際に、幼稚園英語を考慮する必要性は今後ますます高まるであろう。

吉本ばなな『キッチン』の英語訳の比較対照分析——翻訳研究の日本語教育への応用

松倉 緑（インディペンデント・リサーチャー）

本発表では、現代日本文学作品の吉本ばななの『キッチン』について、起点テキスト中の異文化要素、つまり、ここでは、日本の文化的背景に固有の要素(culture-specific items: CSI)と、日本語の音象徴語：擬音語、擬声語、擬態語、擬情語が、英訳過程でどう取り扱われたか、という点に焦点をあて、二種類の異なる英訳版を、比較対照分析した結果について発表する。

分析にあたっては、Sherif 版と Backus 版の英訳版を使用し、等価の概念、記述的翻訳、および、翻訳規範に留意し、比較分析し、考察を行った。分析の結果、CSI の翻訳に関しては、Sherif 版、Backus 版ともに、原文の独自性や世界観が失われていた傾向が見られ、注釈付き翻訳の検討等が示唆され得た。音象徴語については、Sherif 版においては、音象徴語の非常に異なる意味合いへのパラフレーズ、および、省略という方略が目立ち、原文の意図が損なわれた、という特徴が、無視できなかった。他方、Backus 版では、比較的原文に忠実な翻訳のアプローチが取られていた。

今回、本研究のように、日本語の一作品の異なる翻訳の版を分析する際に問題となる点、

および、このような翻訳版の比較対照分析の今後の課題についても、言及を行う。そして、近年の国内外の翻訳研究の動向、および、海外での日本語学習における翻訳作業について参照し、いわゆる、Grammar-Translation Method 時代への逆行を肯定することなく、翻訳研究が、外国語としての日本語教育にどのように応用され得るか、といった論点で考察し、若干の提言を行う。

第2室（新棟 2F 大会議室）

Okinawa under U.S. occupation(1945-1950)米軍占領下の沖縄（1945年～1950年）

与那覇 恵子（言語社会専攻博士後期課程）

本論は牛島司令官の自決により日本軍沖縄守備隊が壊滅した沖縄戦終了後の1945年から琉球軍政府が列島米国民政府(USCAR)に改称される1950年までの米軍占領下における沖縄の政治・社会状況を論述する。導入では論文執筆時点、過去1週間の沖縄の新聞に見る米軍関連の記事によって沖縄の現状を捉える。1章では、沖縄の米軍占領及び基地化がいかに決定されたかを国務省と軍部との意見の対立を含めて論じ、それに日本がどのように関わったかという点で1979年新藤榮一氏によって発見された「天皇メッセージ」を取りあげ、その果たした役割や目的を、沖縄の人々の反応を含めて検証する。2章は「忘れられた島」として1949年11月28日のタイム誌に掲載された Frank Gibney の記事やそれ以前に「忘れられた島」という表現を使用した Lodi News Sentinel(1947年8月11日)の記事に見るアメリカの政策不在や米軍政府の人材不足による沖縄の社会状況を論ずる。3章では1945年から1950の間に起こった米軍関連の事件、事故を前章で論じられた沖縄の米軍の有り様と関連づけながら述べる。終章においては、冷戦構造の中で共産主義者への恐怖感や圧迫が沖縄の政治・社会にどのように反映されたかを米軍政府による介入・圧力を通して描き、それに対し沖縄の人々がどのように抵抗したのかを分析する。占領下の沖縄の政治・社会状況を占領者である米軍の政策、被占領者である沖縄の人々の両面から描写、分析するもので資料は県立公文書館所蔵の公文書や関連資料、沖縄大衆史、沖縄関連の著書、新聞などである。

東アフリカ牧畜社会におけるFGM廃絶プロジェクト

林 愛美（言語社会学専攻博士前期課程）

本報告では、東アフリカ牧畜社会における、女性の性器を切除する行為である Female Genital Mutilation(FGM)の廃絶に向けた取り組みについての分析をおこなう。

FGM は、東アフリカのいくつかの民族において古くから慣習として実践されてきた。ケニアとタンザニアをまたぐリフトヴァレー地域に暮らす牧畜民マアサイの人々も、FGM を慣習として実践してきた民族の一つである。彼らの社会において FGM は、女性が成人するための儀礼の一環として行われ、施術は女性の地位の確立と密接に関わってきた。

このように FGM はマアサイ社会で慣習として行われてきたが、施術の残虐性や女性の心身に与える弊害のために、17 世紀中ごろからキリスト教の宣教師や医師によって問題視されてきた。20 世紀中頃からは、国連機関が FGM を国際社会全体の問題として取り上げたことをきっかけに、様々な機関がこの慣習の廃絶に向けて取り組んできた。

こうした流れを受けて、ケニアのナロク県においても NGO の Tasaru Ntomonok Initiative(TNI)によってマアサイを対象とした FGM 廃絶プロジェクトが行われた。TNI は、FGM を経験したマアサイ女性をリーダーとし、マアサイ文化を尊重した上での FGM 廃絶を目指していた。TNI の活動において注目すべき点は、成女儀礼の過程で FGM が行われてきたことを考慮し、成人儀礼は残したまま切除という実践だけを取り出そうとしたことである。本報告では、この TNI の活動を事例として FGM への介入のあり方について分析したい。また、TNI のプロジェクトについて論じるために、マアサイの FGM の社会的機能およびその移り変わりについても考察する。

日中文献における「九尾の狐」のイメージの変遷と日中比較

王 貝（言語文化専攻博士前期課程）

九尾の狐（以下、九尾）は妖怪として中国と日本で広く知られている。もっとも有名なのは、九尾が化けた中国の美女妲己および日本の玉藻前である。現在、中国における九尾に対する一般的なイメージは、明清時代の『封神演義』などの小説により大きな影響を受け、「絶世の美女に化ける」「人間を誘惑する」などと言ったマイナスのことが多い。一方、日本においても、九尾を「美女に化け鳥羽の帝を悩ます玉藻前」と捉えることが一般的である。しかし、九尾に関する最初の記述となる中国の『山海経』（紀元前 3 世紀～紀元前 2 世紀頃）「南山経」の「青丘之山の狐」に遡ると、九尾はもともと珍獣であり、その出現は吉兆と見なされていた。また、日本における九尾の初めて登場した古典文献——『延喜式』においても、九尾のイメージは珍獣であった。九尾の現在のイメージとは異なることがわかる。

本研究は中国古典文献における九尾の歴史的発展を詳しく検討し、各年代の代表的な作品の分析を通して、そこに見られる九尾のイメージの変遷プロセスを解明することを目的とする。

また、その結果を踏まえ、中国古典文献における九尾の歴史的発展に見られる特徴と傾向を検討してみる。

さらに、異文化受容の視座から、日本古典文献における九尾のイメージの形成および変遷への影響を考察しながら、日本古典文献における九尾のイメージの形成および変遷プロセスに見られる特徴を中国のと比較する。

ハワイにおける「日系」の定義変容—沖縄系日系人と混血日系人からの影響を中心に—

横山 香奈（言語文化専攻博士後期課程）

ハワイは、多くの日系人が居住していることでも有名である。では、「日系人」とは一体どのような人を指すのであろうか。

本発表では、ハワイで毎年1月から3月にかけて開催されている「桜祭り (Cherry Blossom Festival)」という文化イベントを例に、ハワイにおける「日系」の捉えられ方の変容を考察する。具体的には、「出身地 (本土／沖縄)」と「血統 (日本人の血統／日本人以外の血統)」を切り口にする。そして、「沖縄系日系人」と「混血日系人」からの影響を中心に、ハワイにおける「日系」の定義がどのように変容してきているか、その様相を探っていく。

「桜祭り」には、ゴルフトーナメント、ファッションショー、地元高校生による作文コンテストなど様々なプログラムが用意されているが、中でも最も注目を集める催しは「桜の女王コンテスト (Cherry Blossom Queen Contest)」と呼ばれるミス・コンテストである。コンテスト開催初期においては応募資格が「100%日本人の血統であること」とされていた。しかし、表向きに明記されることはなかったものの、正確にはそれは「100%、本土出身の日本人の血統である応募者」を意味しており、沖縄系女性は除外されていた。しかし、本土出身者だけで出場者数を集められなくなると、沖縄系女性にも門戸が開かれるようになった。そしてハワイの日系コミュニティにおいても混血化が進みだすと、今度は応募資格を「100%日本人の血統」から「少なくとも50%、日本人の血統」に変更し、混血の日系女性にもコンテスト応募の門戸を開いた (1999年)。

このような流れをたどっていくと、移民社会ハワイにおいて「日系とはこういうもの」という確固たる定義がありその中で文化が保持・継承されている」というよりむしろ、その時々々の歴史背景やそのコミュニティ社会を構成するメンバーの「都合」に応じて、ある意味「妥協」も含みつつ、「日系」の定義が揺らいでいることが明らかになった。

第3室 (新棟 3F 講義室)

輻輳する「迷宮」——Don DeLillo の *Mao II* を読む

東田 吉史（言語社会専攻博士前期課程）

1979 年のインタビューで Don DeLillo がモダニズム作家である James Joyce の小説 *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) の主人公 Stephen Dedalus の台詞” Silence, exile, and cunning.” を引用していることから、彼の作品中にギリシア神話の芸術家 Daedalus についての物語が織り込まれていると考えても不合理ではなかろう。Daedalus は迷宮を創った芸術家であるが、この迷宮に着目し、作品中に現代社会のどのような側面が照射されているのかを明らかにすることは新たな「読み」を可能にすると考えられる。DeLillo は 1990 年に発表された Mao 彊聞澆離う鵲織罔紂爾任修亮膺邑 Bill Gray に名前を変えて失踪したいという願望を示したことがあるということから、考察対象をこの作品に絞る。

第 1 章ではモダニズム芸術家である主人公 Bill、写真家 Brita がどのような迷宮に陥っているかについてテキスト分析する。

第 2 章では第 1 章を受け、モダニズム芸術家が迷宮に陥る要因を考察する前提としてそもそもモダニズム的な要素がどのようなものであるのかについて、先行研究を踏まえテキスト分析を通じて考察する。

第 3 章では第 1 章、第 2 章を受け、モダニズム的な要素にからむ、モダニズム芸術家を迷宮に陥れる他の要因となっているポストモダン的な要素とはどのようなものかについて、先行研究を踏まえ考察する。

第 4 章では第 1 章から第 3 章の議論を受け、モダニズム芸術家が陥る迷宮がポストモダン的な要素によりスタティックなものからダイナミックなものへと変化を遂げていく様子を考察する。

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』と資本主義——イノセンスという名の陥穽

平川 和（言語社会専攻博士前期課程）

本発表では、J. D. サリンジャー作『キャッチャー・イン・ザ・ライ』(*The Catcher in the Rye*, 1951 年) の主人公ホールデン・コールフィールドと資本主義の関係性を分析し、アメリカの若者が資本主義的価値観に異議を唱えたとき、ある種の構造的な罠に陥ってしまうことを明らかにする。

名門寄宿学校を退学になり居場所を失ったホールデンは、あてもなくニューヨークを放浪する。16 歳のホールデンが持つ疎外感や大人社会への欺瞞を描いたこの作品は、青春文学の金字塔としてこれまで多くの若者に読まれてきた。一見、社会性・政治性が薄いと思われるホールデンの挫折の物語を、マルクス主義批評の見地から論じたのがリチャード・オーマンとキャロル・オーマンである。彼らは、ホールデンの言動の中に反資本主義的な態度を読み取る。それまであまり議論されてこなかった作品の社会性・政治性を浮き彫りにしたという点で彼らの研究は画期的だった。しかし、彼らの研究はホールデンの反資本

主義的な側面しか議論していないという点では限定的なものである。

ホールデンは資本主義がもたらす物質欲にまみれた大人社会を忌避する一方で、子供のイノセンスを非資本主義的なものとみなし、そこにユートピア性を見出そうとする。しかし、本発表では「子供」という概念を再検証することにより、子供という存在が本当にホールデンのユートピアとなりえるかどうか検証する。歴史学者フィリップ・アリエスによると、「子供」という概念は古代から存在する普遍的なものではなく歴史的に作られたものだという。その概念を作った歴史性の一つが、社会の「資本主義化」である。

もし「子供」という概念が社会の資本主義化の落とし子だとしたら、ホールデンが子供のイノセンスを非資本主義的なものとみなす考えには矛盾が生じてしまう。このように、ホールデンは資本主義的なものを避けているようで、実は資本主義的なものに取り込まれてしまっているのである。

『ヘンリー 5 世』におけるフランス語使用が持つ演劇的機能について

飯盛 康史（大阪大学外国語学部非常勤講師）

『ヘンリー 5 世』において、シェイクスピアはイングランドの様々な地方出身の登場人物に特有の発音を有する台詞を与えたり、フランス語の会話のシーンを挿入したりするなど、他の作品にはあまり見られない手法を用いている。この発表では特に『ヘンリー 5 世』においてフランス語が使われていることに着目し、フランス語を挿入することによって生まれる効果を考察していきたい。

フランス語の会話がなされるシーンは二つあり、いずれもフランス王女キャサリン(Katherine)と彼女の侍従アリス(Alice)が主なフランス語話者となっているが、ヘンリー自身のフランス語による台詞も存在する。『ヘンリー 5 世』と同じ「第二・四部作」の歴史劇に絞っても、この四部作が英仏百年戦争の再開に至るまでの歴史を題材として扱っていることからそのほとんどにフランスが舞台となるシーン、ないしフランス人のキャラクターが登場している。

では、なぜシェイクスピアは『ヘンリー 5 世』においてわざわざフランス語を話させたのか。ジャネット・ディロン (Janette Dillon) は著書 *Language and Stage in Medieval and Renaissance England* の中で『ヘンリー 5 世』に触れ、フランス王女が英語を学ばされるという姿を描くことで観客に「イングランドがフランスを支配する」という構図を見せる効果があるとしている。

5 幕 2 場 9 9 行目から始まる、ヘンリーからキャサリンへの求婚シーンではほとんどヘンリーが一方的に話し、結果的に婚姻が成立するので支配-被支配の構図が確かに成立しているように見える。だが、キャサリンは「わからない」と拒絶することで、ヘンリーにフランス語を話させる。言語が通じないことを逆に利用して、キャサリンは一方的にイン

グランド化させられることを回避している。

このように、お互いに通じないという状況でフランス語が使われることで支配・被支配の構造と同時に支配への抵抗、あいまいな同一化という結末が示されるのである。